浅間山北麓ジオパーク通信

あさまびと

Vol.14
2020
秋号

▲8月11日ドローンで撮影(写真提供：嬬恋村)

鎌原・大笹エリア紹介

昔から、幾度となく大きな噴火をおこしてきた浅間山ですが、江戸時代には嬬恋村や長野原町を通り抜ける信州街道があり、大笹や鎌原の宿場は江戸から中山道や善光寺につながる交通の要所として栄えていました。

また、大笹の関所は近隣の重要六ケ所の関所の1つとして数えられていました。そんな時、街道と集落は浅間山の大噴火にみまわれました。

今から237年前、天明3年の噴火で鎌原村を土石なだれが襲ったのです。辺り一面をのみこんだ土石なだれですが、たまたま遠出していた人や、鎌原観音堂に逃げ込んだ93人が助かりました。

この土石なだれは吾妻川を下り、翌日には江戸や銚子まで流れ着いたと言われています。

その後、生き残った93人が近隣の人達の手を借りながら、力を合わせて復興してきました。

現在、天明3年噴火以前から唯一残る鎌原観音堂では、今でも地元の方が観音堂を守りながら語り継ぎをしています。

今回はそんな歴史のある鎌原大笹エリアを紹介します。

▲昔の三原の崖
およそ1400年前の仏岩火山の巨大噴火によって堆積した層です。
天明の大噴火の時、鎌原原泥流はここも滝のように流れ落ち、吾妻川を泥流となって下りました。

My GEO STORY vol.13

米・食味分析鑑定コンクール国際大会　金賞受賞
土屋　幸雄さん

今回は、米・食味分析鑑定コンクール国際大会の国際総合部門にて金賞を受賞されました土屋幸雄さんにお話を伺いました。

土屋さんは、昭和24年5月生まれの71歳、天明3年（1783年）の浅間山大噴火により大災害を受けた鎌原村の生き残りの末裔です。先祖の方々は、埋まった村の上に踏みとどまり家を建て、畑を耕し薪・炭を作って生計を立ててきたと伝わります。災害から30～40年経ってから、かべ土を取ってきて田んぼを作り、稲作を始めました。昭和36年農業基本法が施行され、農業の機械化が進みます。そこで、土屋さんのお父様は、農業用資材、農機具を販売する土屋商店を立ち上げます。土屋さんはその事業を引き継ぎながら5反の田んぼも守り続けています。稲作にはむかない火山灰土から美味しいお米を作るため、土地改良や様々な創意工夫を重ね、地域に普及し平成17年から米・食味分析鑑定コンクールに出品します。そして、平成29年見事金賞を受賞しました。金賞は約5700人のエントリー者の中から14人が選ばれた貴重な賞です。嬬恋村からは、4人もの金賞受賞者が出ています。自然と向き合い、戦い続けてきたこの地域の方々の意気込みが伝わってきました。

土屋さんは嬬恋村村会議員の3期目を務める傍ら、浅間山北麓ジオパーク推進協議会の調査保全委員としても活躍されています。またジオガイドとして嬬恋村、鎌原地区の口伝えの歴史を伝える語部です。いま、その内容を文章にまとめ始めているそうで、後世に残る貴重な資料として、完成を楽しみに待ちたいと思います。

ジオジオ豆知識 vol.13

「天明の大噴火」に学ぶ公助・自助・互助・共助の災害対策

武蔵野大学名誉教授　川村　匡由氏

浅間山「天明の大噴火」により上野(こうずけ)国吾妻郡鎌原村（現群馬県吾妻郡嬬恋村鎌原地区）では死者477人 、流失家屋95戸を数え、“日本のポンペイ”といわれているが、ヴェスヴィオ山の噴火に襲われた古代都市、ポンペイは、文字どおり、廃墟となったのに対し、鎌原地区は村外れの鎌原観音堂に逃げ込み、難を逃れた人々が自助と互助、さらに近隣の名主たちの共助、および沼田藩や江戸幕府の公助によって生活を再建、明治になって子孫が原野を開拓して高原キャベツ栽培に成功、戦後は軽井沢と草津を結ぶリゾート地となった。その意味で、災害列島に住む現代人にとって、先人たちの苦労、および政府・自治体による公的責任としての公助をベースに、しかし、国民も企業も自助や互助に努めたり、被災地に義援金や支援物資のカンパ、あるいは災害ボランティアとして共助したりする、という防災福祉コミュニティの必要性を今に伝えている。

そこで、小生はこの30年間、これらの調査研究をし、現代人の課題として『防災福祉コミュニティ形成のために　実践編』大学教育出版、2018年などを上梓、政府・自治体の公助をベースに、しかし、国民も企業も自助、互助、共助に努め、防災福祉コミュニティを形成し、先人たちに負けないようなアイデンティティーを発揮すべきではないか、と確信している。

このようななか、今般の新型コロナウイルスの感染拡大という新たな難題の折、活動に支障を来してはいるが、長野原町と嬬恋村が連携し、2016年、日本ユネスコ国内委員会より浅間山ジオパーク推進協議会としての認証を受け、「浅間山とともに未来へ～災害と復興がつなぐ人々の営み～」をテーマに追求している地域の持続可能性のなかでも、防災福祉コミュニティ形成の重要性も提起されてはいかがだろうか。長野原町・北軽井沢に山荘を持って約30年もお世話になっている一人として、切に願うものである。

鬼押し出し園の入り口にある名主の一人
黒岩長左衛門の碑

活動報告

当ジオパークオリジナル「浅間山T-シャツ（写真左2000円/税込)」と「ジオエコバック(写真右800円/税込)」を作成いたしました！
２点ともオシャレな仕上がりとなりました。地域交流センターにてお買い求めいただけます。

筑波大学生命環境系土壌環境科学、浅野眞希研究室の皆様が、「鎌原キュウリ」の調査のため、お越しになりました。今後も土壌診断や生育状況の調査を行います。

浅間牧場のガイド様向けにスキルアップ研修会を開催いたしました。夏休みに向けてそれぞれ熱心に参加して下さいました。

発行元：浅間山ジオパーク推進協議会
Mt. Asama Geopark Promotion Council

〒377-1524 群馬県吾妻郡嬬恋村大字鎌原494-45
TEL/FAX：0279-82-5566
URL：www.mtasama.com
E-mail：geoasama@vill.tsumagoi.gunma.jp
Facebookwww.facebook.com/asamageopark
制作担当：広報・観光委員会

ガイドの受付しています

「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ガイドによる案内の受付をしております。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。

［料金表：ジオガイド１人あたり］

半日¥5,000～8,000	ジオガイド１人につき
１日¥10,000～16,000	15名位までガイド可

編集後記

今年はコロナウイルス感染拡大防止のため、様々な行事の開催が中止や延期となっています。こんな時こそ、地域のすばらしさを再発見できるような内容をお届けいたします。

鎌原大笹エリアから学ぶもの

約20万年前から始まった浅間・烏帽子火山群の活動で、南進していた吾妻川が堰き止められ出来た巨大な嬬恋湖の堆積が見られます。その中にはゾウの歯や花粉など当時の環境を示す化石が含まれています。

▲吾妻川沿いにみられる堆積層

浅間山は10万年の歩みの中で、なだらかな高原を形成し、豊かな自然をもたらせています。私達は浅間山の恩恵を受けながら日々の暮らしをしています。 また、生きて行く上で大事な防災学、社会学、歴史・民俗学的にも大切なことを教えてくれるところとなっています。

▲宿場大笹村

▲大笹関所跡

江戸時代には、信州街道という大きな道が東西に走り、江戸、高崎や軽井沢から草津温泉や長野の善光寺へ行く人たちで賑わっていました。それ以前、戦国時代は、鎌原城があり、真田の軍記書物である加沢記に頻繁に出てくる歴史のある地域です。

宿場・大笹村は、西吾妻地域の中心的な宿場として、幕府の物資や役人の往来などの公用から 旅人や物資輸送のために常に馬6疋が義務づけられ、各宿場を繋いでいました。

▲沓掛海道道しるべの碑
大笹宿から信濃追分宿まで6里。そのため、浅間山麓は6里ヶ原と呼ばれています。

■おてんまという言葉

街道の利用が増えると、応援の人馬がたくさん必要でした。 近隣の村々から支援する伝馬（てんま）として出役しただけではなく、参勤交代時の手伝いや関所の橋（刎橋）の架替えに、西吾妻の29ヶ村からのべ6,000人余が12～13年ごとに充てられたので、「お伝馬（おてんま）」は勤労奉仕作業の言葉として一般化していきました。

鎌原村の復興と絆

天明3年（1783）８月５日（旧暦7月８日）浅間山より12km離れた鎌原村は、浅間山の噴火による「鎌原土石なだれ」に襲われました。信州街道で人々が行き交っていた鎌原村は、一瞬の間に全村が流されたり、埋まったりしてしまいました。多くの尊い命が失われ、土石なだれの異変で高台に逃れた93人が観音堂に避難して奇跡的に助かりました。生き残った人々は、一族の契りを結びお互いに助け合って復興していきます。隣の村大笹、干俣などの支えや幕府、熊本藩よる支援を受けながら土地を平等にわけ、埋まった地に命をつないできています。 そうして今の鎌原村があります。

唯一残った鎌原観音堂

村の見晴らしのよい高台にあり、難を逃れ唯一残った建物です。建てられてから300年以上も経っています。土砂ながれの異変にきづいたわずか93人が観音堂に避難して助かりました。観音堂は村民の命を守った場所です。また、復興の心の拠りどころになりました。

生死をわけた１５段

昭和54年の発掘調査で、当時あった50段の石段の最下部に2人の女性の遺体が発見されました。まさに生死を分けた石段であることが実感されました。鎌原で起きた災害の悲惨さを伝えています。

土石なだれ・浅間石の不思議

鎌原土石なだれは、吾妻川や利根川を100km以上も流れ、はん濫させ、川沿いの住民1,400人を超える犠牲者を出した大規模な土石なだれ、泥流でした。また別荘地や鎌原地区には、浅間石（黒岩）と言われている大きな岩がありますが、それも天明3年の土石なだれの時に運ばれてきた岩の塊です。237年経った今でも多くの研究者によって、土砂なだれや浅間石の研究が行われていますが、その発生メカニズムは謎に包まれています。

供養塔

観音堂の参道入り口に33回忌の供養塔があります。吾妻川、利根川（銚子、東庄町など）、江戸川（葛飾帝釈天、江戸川区善養寺など）沿いに178基主だった供養碑等が建てられています。

人から人への語り継ぎ

■浅間山噴火大和讃

災害被害や復興の過程を詠み込んだ和讃をまわり念仏という形にして、月２回唱え続けています。

■みごだんご

春のお彼岸の入りにみごだんごという独特の形をしただんごを作り、観音堂に供え、供養をしてきています。

また、鎌原観音堂奉仕会の人々が、観音堂に集い、観音堂を守りながら、語り継ぎをしています。